

## 伝統と進歩

本年五月十六日・十七日の両日、第四十五回日本保育学会がお茶の水女子大学で開催される。四十五年前の昭和二十三年十一月二十一日の日本保育学会設立、第一回大会と重ね合わせたとき、私たちはそこに見出すであろうか。

学会設立の主意書には、これまでの我が国において、保育についての理論的な研究は、ほとんど未開拓であり、よって、保育に科学的な基礎をもたせなければならぬこと、そしてその目的は年若い保育者を育て、正しい姿において乳幼児保育

### 千羽喜代子

を展開させることにある——としている。

四十五年後の今日、保育学会主意書の目標とするところは大きく実った。実践科学として、学問性の薄い複合領域として扱われてきた感が強く、だからこそ保育学に科学的な基礎をもたせるべく模索して、今日の成果をみるにいたったのである。この成果の蔭には、現存する、また故人となられた先輩の諸先生の貢献を忘れてはならない。合計特殊出生率一・五四という少子化時代に生きる子どもたちにとって、いろいろな意味で、経

済的に豊かな環境の中にあることを幸せとするかはともかくとして、現代社会では自己選択や自己決定能力が要求される。これらの能力は幼い時期の対人関係、例えば、親や保育者や友だちとの人間関係を通して育てられる部分が大きい。

保育学のねらいが乳幼児の健全な人間形成の基礎づくりにあるとき、社会に適應するのみならず、「創造性」の要素が求められる。

しかし、この創造性の要素は今に限ったことではない。大正時代において、一人の保育者、岡 政女史が、岡山において、東京在住の倉橋惣三先生の保育理念を現場で実現させるために、幾度も連絡をとりあいながら、奮闘なさった記録に、幼児の創造性を育てることがねらいとしてあげられている。

今日、私たちが新しい保育を求めて進歩的であるかのような錯覚をもつが、それは過去において、そ

れを追い求めた保育者の一途な伝統の延長線上にあることを知らされるのである。

また、保育に関して新しい試みをしたとしても、それは一人の者の努力の成果が広く保育界に普及してきた場合もある。私たちが新しいと思っっていることが、意外に過去の先達者によって試みられていることが多い。

乳幼児の保育は古くて新しい営みである。

保育の進歩とは何をさしているのだろうか。保育の科学化が進歩であるというならば、その一方においては、人間が人間を人間として育てている以上、保育の心、保育のエスプリを見失わない保育者・研究者の自己反省が常にともなうことが必要となるであらう。

(大妻女子大学)